

分科会まとめ発表

第 1 分科会・・・草加キングス・ガーデン 栗原基



第1分科会は新しい施設づくりと人材育成というテーマで42名の多くの方々と話し合いの時を持たせていただきました。非常に人数も多くテーマも大きくありましたのでこの発表もまとめきれないのが本音のところですけど、報告あるいは私の個人的な感想を踏まえて報告させていただきます。

分科会の始まりに三谷六郎氏からキングスガーデンの出来た時またシアトルでの教わったことなどの経験・体験談からお話を頂きまして、今一度キングスガーデンの始まり、起源について教わったところです。また三谷さんがこの度研修に参加するためにお姉様の葬儀がある中で、時間を割いて来て下さったということ涙ながらに語って下さって、キングスガーデンをどれだけ愛しておられているかということ知らされ又教えられ私共は感動したところです。又その後にナーシングホーム白井城の高田さんから新しい施設づくりについて流れについて教わったところです。新しい施設をこれから作ろうとあるいはまた新しく考えているところには非常に参考になった発表だったかと思います。

テーマについて一つはリネンの共有というところがありますけれど、中々深く学ぶところまでは時間がなく出来なかったところですが、私がキングスガーデンで働かせて頂いている中で思われているのは、地域の教会のサポート、協力牧師会のサポートというものが非常に重要だと思っております。施設長が教えていくというのなかなか難しいところがあります。その中で地域の教会、牧師先生のサポートがあるからこそこのキングスガーデンが立ち上げられたわけですし、又運営においても地域の教会先生方のサポートは不可欠なものではないかと思えます。

又施設づくりにおいては色んな悩みを持っていらっしゃるものが改めて教えられました。一つは法人格をどうするか。或いは土地を取得しなければならないけれどもそれをどうしたらいいのか。又お金がかかる。お金をどうしたらいいのか、どうやって集めるのかどうやって借りるのかということで疑問なり質問なりがあり、又適切なアドバイスもその中で得られたのではないかと思っております。

施設運営においては人材確保、資金問題があります。又人材育成においてもリーダーシップそれから他の職員をどうやって教育していくのかということが挙げられておりました。その中でもまとめにはなりませんやはり聖書に立ち返り、又祈りをもって信仰をもって進んでいくべきであるということが確認できたのではないかと思います。

第 2 分科会・・・キングス・ガーデン新潟（特養カナン） 田中康也



第2分科会では2つの事例について学びました。事例の共通点としては独居で低所得ということで違いがあるとすれば、本人がサービスを使いたいかわからないか、希望があるかないかというところで学ばせて頂きました。

一つ目の事例ではサービス拒否があって、中々サービスが入れら

れなくて最後はホームヘルパーだけを入れたんですが、その後に入院して転院後に亡くなったということで困難ケースについてみなさんと話し合いました。

2 番目の方は 90 歳前半の女性で認知症なんですがまだまだ意思表示ができるという方で、最終的にはグループホーム入所という形で決着がついた方なんですけれど、こちらの方はグループホームに入りたいという希望がありまして入れたという事例でした。この共通点としていかに介護保険サービス外の社会資源のインフォーマルな部分をいかに活用していくかということを学びました。こういった事例で色々と意見があったんですけどこの事例でいかにインフォーマルな資源を大切にしてお人自身のこういったマネジメントをしていくかということを学びました。

今日の午前中の討論では、それぞれの個別の悩みの話し合いを行いました。その話し合いの中で一番印象を受けているのがやはり難易性ということで、ケアマネジャーだったり相談員だったり施設側と利用者側の狭間に立って大変だということが永遠のテーマであると思うんですけど、みんな悩みを抱えながら職種を全うしているんだなと感じました。で私自身も相談員としてやっているんですけど現場とのやり取りであったり上の方のやり取りだったりとかあるんですけど、やはり一番は利用者のことを考えてケアマネジャーではないんですけど、施設内のマネジメントっていうのを行っていきなと感じました。

第 3 分科会・・・守谷市障がい者福祉センター 綾部ゆかり



第 3 分科会では、障害をお持ちの方を日々支援させて頂く中で、どういう支援をしたらいいのだろうか困っている事例を基に検討がなされました。参加者の皆さんが積極的に質問意見をされて、お一人お一人がそれぞれの施設の現場で真剣に日々ご利用者のために向かい合って支援されている姿が伺えました。

一つ目の事例ですが相談支援事業所に民生委員の方を経由して寄せられた相談事例です。ご本人 47 歳男性 20 代で発症した統合失調症の病状に苦しみながら 84 歳の母の介護をしているという事例でした。お二人にとって望ましい生活とはということで検討し話し合いました。お二人は一緒に生活したいという望みはありますが、母の介護度が日々増してきて心身ともに疲れ切っており、母への介護サービスを提供しようと思っても息子さんご本人が人とのかかわりを持つことに強く緊張し不安定になってしまうため、これ以上サービスを利用して人が入ることは難しい。また息子さんが一人になることが難しいため母が入所することもできない。ご本人も外へ出て集団の中には入れないため、サービスを利用することが難しいという八方ふさがりのような困難なケースに、みんな頭を抱えながら考えました。様々な意見が出されましたが、最終的には親子が少し離れる時を持つことでお互いの負担を軽くし、お二人が安定した生活を遅れるように、また母亡き後のことも考えて一人での生活に少しずつ慣れていく必要があるのではないかと考え、具体的に母親の方にショートステイを利用して頂いてはどうかということが妥当な案となりました。外部の介入が難しくともすると共倒れになってしまう状況の中で、長い時間をかけて信頼関係を築いてその方に必要な助けを提案し提供していく相談支援という仕事の大切さと重要性を改めて感じさせられた事例でした。

二つ目ですが施設に入所されている知的障がいの方の事例です。とても人懐っこくてニコニコと明るい性格で素敵な方ですが、相性の悪いご利用者の声を聴いただけで興奮して物に当たった

り人を叩いたりしてしまう問題行動がありました。同じユニットなので顔を合わせることも多くてそのような行動を未然に防ぐ方法はないかということでした。この事例に対しても様々な意見が出されましたが、関わってこられた職員の今までの経験をお聞きすると注意引きの行動が多く、職員が他のご利用者にやさしく接しただけでも嫉妬してしまうというような様子が見られるため、職員の1対1での個別の関わりであったり、その方に役割を担っていただきそれを支援員が褒めてあげることなどでこの方の別の問題行動が解決されてきたこともあって、今回の件に関してもご自身がご自分にはかけがえのない存在なんだと感じられること、また自分はあるのままで受け入れてもらっている、愛されているんだと心が満たされていけば問題行動も少しずつ減ってくるのではないかという意見でまとまりました。

障がい者の方は幼い時からできない事や失敗体験、また周りの環境によってマイナスの自画像を描いてしまいがちですが、そのままでもいいのよ、大丈夫だよという私たちの支援によって安心でき、プラスの行動に変わり笑顔あふれる日々を過ごしていただけたらいいなと思います。またご利用者と共に喜びご利用者と共に泣くことが出来る、ご利用者に寄添う支援者でありたいと思います。

第4分科会・・・ケアハウス主の園 山崎公三



ここにいらっしゃるほとんどの方あるいは軽費老人ホームやケアハウスに勤めている方が、ケアハウスってどういうところですかと聞かれたときに中々答えられない、どう表現していいかわからないということが多いかと思います。普通はあり得ませんが病気を抜きにして単純に年齢と共に体が不自由になっていくということを考えます時に、60歳位の時は自立していると考えられます。75歳位になってくると段々弱くなってきて生活の一部に関して支援が必要かなと。半自立という時期ですね。それから85歳位になると常時介護が必要になるのではないのかなとそういう健康状態になる。個人差はあるので一概には言えませんがそういうことが考えられます。この中で自立期の後半期、半自立の方を対象とするのがケアハウスという施設になります。言い換えますと住居の安心とか見守りの安心、食事の安心、友人たちとの交流の確保、社会性の確保というようなケアが求められるのがケアハウスということになります。で介護施設になると更に介護の安心とか医療の安心とかが加わってくると。そういった差は出てきますね。ケアハウスにいてももちろん介護を受けるような状態になっても生活を続けている方もいます。それはどういった方が対象でどういった方が対象でないかと言いますと、まず何時何分から30分、何時何分から1時間とそういうサービスで不足している部分が補える方はケアハウスで生活ができるということになります。認知症の重い方のように絶えず誰かが何となく見てないといけないということになりますとケアハウスでは厳しいところがあるということになります。ここまでのケアハウスについて皆さんご理解いただけたかと思います。

ここからが本題ですけれど、認知症で言いますとケアハウスは介護保険の分類でⅡaとかⅡbといった範囲ですね。Ⅲ位になりますとグループホームという所になります。今回はケアハウスの困難事例、グループホームの重度化ということでしたので認知症の分類でⅢ以上の方という範囲のお話をさせて頂きました。1日目は認知症の比較的重い方に対してどういうケアをするかと

いったところで議論をさせて頂きました。いろんな意見が出ましたがこれが1番とかこれが良くないということはありませんのでその時の条件によって様々な対応があるんだなあと。或いは施設の抱えている状況によって資源の状態によって対応方法も異なりますねえ、ということが確認できました。

事例発表ですけど1件は草加、1件は筑波からありました。草加においては個々の事例というよりもケアハウスという特色を考えて全体的な事例、施設全体で抱えている問題の中の対応というものを発表して頂きました。内容は水分補給に関してです。水分補給と言っても色んな対応があります。水分補給を拒否する方もいらっしゃるってその中でどうやってプライバシーが確保されている施設の中で行っていくかということを学びました。

筑波ではAさんの事例について学びましたがこれは中々結論というものがないと。筑波では毎年難しい事例を出していただいているんですが、毎年事例が変わっているのできっと解決しているんだなあと。今回もこういう方法があるんじゃないでしょうかと言ってもそれもう対応済みですとか中々難しい問題がありますね。そういう中で問題を抱えている方に対して自分たちがどう関わるかによってその人の心が変わってきたりする。後ろ向きな気持ちが前向きに変わってきたりする。それが非常に嬉しいしその人がかわいく見える瞬間でもあったりするというご意見もありました。そのことで私たちは救われてこれからも入ってる方のために、前向きに生きられるように支援できたらいいねというところでまとまりました。残念だったのは施設の運営のことはお話を出来なかったんですけど今日感想をそれぞれ述べた時に、色んな面白い話が出てきて、信仰の話とかにも及んできました。窓口が開かれたところでタイムオーバーになりましたけれども今後またお互いに交流を通して学びたいと思います。

第5分科会・・・練馬キングス・ガーデン 栢沼 撰



第5分科会では2つの事例について話されました。職種や家族との連携によりその人の最後の時まで好きなものを食べて頂いたりとか、そういったことが出来たというお話は聞いていて励まされましたし学ばされた次第であります。また入職したての頃はそういった看取りに対する不安であったり恐れという思いが、経験を積んでいく中でその人の最後の時に関わらせてもらえたことに対して感謝や幸せを覚えることが出来るようになったというお話も嬉しく思いました。

もう一つの発表では112歳という高齢の方ですけど、その人の状態が変わっていく中でその人が望む静かで苦しみのない時間を過ごしたいという思いをどういう風に汲み取っていくかということで全職員で話し合われたことが印象的でした。何かをすることで体への負担を考慮しながら何もしないことであったり、その人の好きな食べることを楽しみを奪ったのではないのかといったジレンマもある中で、それでもやはり立ち返るところはご本人の希望であり、静かで苦しみのない時間を過ごすというそこに立ち返ることで、気持ちが支えられたという話も教えられました。またそういった最後の時に、枕元には何でもノートという形で置かれたノートに本当に色んな職員、例えば厨房の職員であったり家族であったり、その人に関わった記録が手書きで書かれてそれを読むことで他の職員や家族も分かち合うことが出来ているというお話も参考になりました。これは今は〇〇さんの日記という形に変わっているということで、色んな施設も持ち帰って具体

的な形になるのではないかと思います。

分科会Ⅱではそれぞれの質問であったり話し合いました。ターミナル期、エンゼルケアの後のパットを当てるとかオムツを当てるのかとかそういった細かいことから、食べられなくなった時にどのように判断をしていくか、肺炎にさせないために食事水分の中止ということもあり得るでしょうし、また VE（嚥下内視鏡）検査による評価や口腔ケアの先生にも相談しながら無理のない形で食事の形態や姿勢にも目を配っていくということ。また主治医の先生から最後の時を迎えているというお話を聞いた後、治療するために病院かこのまま施設で過ごすかという選択肢のほかに自宅で最期を迎えるという選択肢もあるということもうかがいました。まだ実践はなされていないということですが、こういったこともこれから私たちが考えていく必要があるなど。あと意識がない方を施設で看取りのために受け入れる、又受け入れているといったお話や身寄りのない方の受入れということにも成功例実践例のみではなく失敗例も話されました。今私たちがしているケアを聞きこれからどのように仕えていくか、それぞれの施設に持ち帰って取組んで行きたいと思います。また来年出席するメンバーは変わるでしょうけれどもこういった連合研修で発表することで、思いをつなげていければと思います。

第 6 分科会・・・筑波キングス・ガーデン 小川内秀樹



23名の参加者の中には相談員、栄養士さん、ヘルパーさん、機能訓練指導員、事務員の方、教会の方それと実際に介護をされた方などがいらっしゃいました。私たちの班はユニット型と従来型の施設の方もいましてその中で5つのグループに分かれてグループ毎に話をさせて頂きました。グループごとに意見を出して発表する形にしましたが、3つ事例がありまして時間が足りなかったというのが

正直な感想です。限られた時間の中で答えを見つけていくことはできませんでしたが、3つのケースそれぞれの中に介護していく中での認知症ケアの難しさ、課題が見えたように思います。

まず1つ目のケースは笑顔を見ることが出来る、2つ目はその人らしい生活をする事が出来る。3つ目は落ち着く場所が見つかる。それぞれの視点はこのような形でした。3つの事例が認知症という病気そのものではなくて、その人の生活またその人自身、その人らしさに焦点を皆様が当てていたところに私はキングスガーデンらしい温かさを感じました。認知症ケアの現場の課題は、例えば帰宅願望やこだわり、また同じ言葉を繰り返すなどの行動がありますが、そういったことに対してヘルパーさんたちは、ケアへの思いはすごく内側に持っておられます。ただ時間がないというのが私たちの悩みです。業務の中で出来ないのではないか、業務外でないと付き添えないのではないかということが挙げられました。一つのまとめを挙げるとすれば、認知症の方にはとことん付き添う。付き合う、寄添うこと、その2つだと思います。その中で利用者が落ち着いたりご利用者の柔らかい表情を見ることが出来たという実践事例の発表がありました。ただそうするにはヘルパーさん同士の信頼関係がなければならぬ。ちょっとした声掛けを行えるヘルパーさん同士の雰囲気的大事ということがありました。一人の認知症の方に付き添うためにはほかの利用者を置いていかなければなりません。その時にあるヘルパーさんに「ちょっと行ってくるからお願いね。」という一言が言える職場の雰囲気が必要という皆さん同じ意見がありました。又一方で寄添うには長い時間が本当に必要なのかということがありました。1分でも2分でもそ

の人を見ていく。ただ一緒にいるだけでなく寄添う気持ちを持っていく意識が大事、意識もっていることが大事だという皆さん意見がまとまりました。そしてヘルパーだけでなく他職種の協力と連携が必要だということが皆さん一人一人のご意見でした。目立つ方の対応ばかりが認知症ではありません。大切な一人一人に仕えていくことが大事です。私たちヘルパーの働きは非常に地味な働きですけど、その人を知る為に生活歴を探ったりまた小さな気づき小さな変化に気づいたり、又それを記録したりチーム内で共有したりそういった一つ一つの小さな準備が必要です。

最後に同じ悩みを持っているヘルパーさんたちが、色んな施設の方が集まりましたから、その中で同じ悩みを持っているということが分かっただけでも私はもっと頑張れるという方がいらっしました。本当にその通りだなあと思いました。人の多さではなく寄添うという気持ちが大事です。手法よりもケアの気持ちの面を共有できたことに今回私たちの分科会の意味があると思いました。また仕えるケアとは即ち仕える気持ちであるとまとめることが出来ると思います。

第 7 分科会・・・特養あったかの家 アリヤ聖子



昨日の TCU の井上先生の方から高齢者福祉と教会の関わりのプレゼンテーションで様々なことを学びました。まず全国各地に広がる地域密着型の介護福祉事業の広がりについて事例を通して教えて頂きました。

まず先生のところで喜楽希楽サービスというのをやっていてこちらは 2003 年から通所介護としてスタートして訪問介護、居宅支援事業所、介護タクシーと幅広い地域密着型のケアが展開されているなあと感じお話を伺いました。それ以外でも全国的に静かにじわじわと広がる感じで、岡山、宮城、相模原で高齢者の施設に限らず障がい者対象ですとか子供の里親型グループホームですとか障害者就労支援の施設とか様々な施設が全国的に広がっていることを学びました。一つ事例でとても面白いなあと思ったのがまきばフリースクールというところでデイサービスとフリースクールが一緒になっている施設があるそうで、そこにデイサービスとして来られていたどこにも引き取ってもらえない認知症の不穏の強い方がいらして、その方とあと引きこもっているフリースクールに来られている子供さんが一緒に生活を共にしていく中で、この認知症の方が私がこの子をどうにかしなきゃということで元々先生だったらしいんですが、そういう関わりの中で認知症の不穏症状も収まる、その引きこもりの子供も元気に活性化するというそういう恵みがあるので見られたという事例もお聞きしました。

それ以外にもデイサービスとか特養とかこれから NPO を立ち上げているという様々な方が集まってディスカッションした中で意見として挙がったのが、これからの所はもちろん祈りながら進めているということでしたが、既に働きを始めている事業所に関してもやはり原点に立ち返って祈りながらビジョンを抱き出来るところから一歩ずつ進めていこうということが意見の中で出されました。

本日はそういったことを踏まえてより具体的に福祉を通して教会として何ができるのか何をすべきかまた、どんな問題点があるのかということを中心に話し合いました。やはりどのところでも高齢者が増えている、教会でも段々と高齢化が進んでいる。またそういう方をケアする次世代の若者がいないという課題が挙げられ話し合いました。そういう方々が教会から離れずに地域

でどうやって生活していくか、その為に教会としてこういった働きが出来るかというところをこれから考えていかなければならないことだと思いました。ハードはどんどん作れる、でもその中で人材をどう育てていくかというところに皆さん色々悩み考え今日話し合われたところですけど、一つの教会だけではなく教派を超えてネットワークを作っていれば協同して進めていくことが大事なんではないかということも話し合われました。又さらにクリスチャンとかノンクリスチャンとかそういうことを超えて、ノンクリスチャンも大事な働き人であるということを私たちも認識して、皆さんで協力しながら地域の中でこういったことができるかということを考えてながら進めていくことが大切なんだと思いました。

最後にこれは皆さんの中で同じ考えというか統一した考えなんですけれど、やはり御言葉が語られているということが大切だなあという風に話しました。様々な資金ですとか運営とか人材育成とか課題は沢山ありますけれど御言葉を中心に話をしているとどんな問題でも解決する。やはり色々な職場の中で御言葉を語る機会がある、語る環境があるということがとても大切で、こういった環境を私たちがいかに作っていくかということが重要であるということを感じました。

分科会発表総括・・・宇都宮 和子

皆様お疲れ様でした。最初感じたことは素晴らしい発表を聞いていて分科会にして本当に良かったなあと思いました。連合研修開催の話があった時にテーマを何にしようかと。それで3ヶ月ちょっと前に集まってテーマについて話し合いました。「私たちに出来る仕えるケアの力」これはどんな時でもご利用者を中心に仕えるケアの力、これをテーマにしようかと話がまとまってそして講師の先生として、まず筑波でやるので是非三谷先生に来て頂きたい。三谷先生が筑波に種を蒔いて下さって今こんなに広がっております。それに大変な時に三谷先生が来て下さったことも深く感謝いたします。そして野田先生については泉田先生から「野田先生いいよ、行ってきたから」と報告を受けました。私も実は野田先生を知っておりまして施設も見させて頂いたことがあるんですね。それでこことはまた違った視点からのいいアドバイス、お話があったなあと思います。



朝起きて富士山、又筑波山見て頂けましたでしょうか？こんなに筑波山のすそ野が綺麗に、そしてこちらは富士山が見えたということで、この2日間キングスガーデン発祥の筑波で少しでも筑波の香りを皆さんに味わって下さればという思いでさせて頂きました。今回私自身も驚いているんですが職員には感謝しています。私が言うのも変ですけど職員は成長してるなあって、何かあると今まで目立たなかった方が光るんですね。大変なことをやった時に本当の職員の姿が見えます。私は色々な大変なことを行政からも理事長からもお願いされて今まで NO と言ったことがないんですね。もちろん家族から言われても誰から言われても NO と言ったことはまずない。どうすれば受けられるか。ここのキングスガーデンの一番の基本は、神様を通してこの地に三谷先生が蒔かれたそのビジョンをぶれずに楽しくやっていきたいと思います。今回こうして連合研修が出来ましてスタッフが輝いているのを見させて頂いて本当に感謝しています。組織が段々大きくなると色々な課題はあります。介護保険や色々な制度は利用者中心ですけど、働くスタ



ップがあってこそ施設だと思っています。これからも KG 連合がますます発展して継続することを祈っています。そしてまたシアトル研修にも 10 名の方が参加しました。帰ってきたとき空港まで迎えに行ったんですけど、どなたも輝いていてキングスガーデンのビジョンを受けて帰ってきました。

私はクリスチャン・ノンクリスチャン関係ないと。ここに集まって与えられた人が神様から選ばれた人、だから大切にしたい。同じスタッフですので私にとって色はありません。ですからそういう人達がみんなやっぱりキングスガーデンって素敵ねって、キングスガーデンって素晴らしいねって。ここは布教の場ではないけれどいつの間にか地域の方たちがいいねって言うてくれるようになりました。こうして学びがあるから私たちもぶれないで成長を続けているんだなあと思います。今高齢者ばかりでなく障がい者支援事業、困っている子供たちのためにこれからキングスガーデンの働きが増々全国に広がって輝いていくことを願っています。私たち一人一人が遣わされて、仕えるケアの力を発揮していきたいと思います。2 日間有難うございました。

閉会礼拝メッセージ

理事長 泉田 昭

大変祝福された第 21 回日本キングスガーデン連合の研修会を今終わろうとしています。皆様の熱心な参加、協力、話し合い又講師の先生方の素晴らしいご厚意によって非常に内容のある研修会であったと思います。

昨日この場所に初めてお伺いしましてこの部屋に入ったときの最初の印象は、皆さんの美しい笑顔、それを拝見したときに、ああこれがキングスガーデンだなと思ったんですね。そういった笑顔と雰囲気の皆様は毎日、入居者、ご利用者に仕えて下さっている。キングスガーデンの働きはそこで行われてきていると心から感謝をしております。現在キングスガーデンに加盟している施設は丁度 60 になりました。最初は 2 つ 3 つで研修会をしても 10 名足らずでしたけれども今回は 150 名の方が全国から集まって下さったということも非常に感謝なことでもあります。

私たちはこの研修会において素晴らしいお話をお伺いし、先ほど分科会の素晴らしい報告がありましたけれど、実に内容のある話し合いが行われたことを感謝すると同時に、是非これからそれぞれの施設における働きに活かして頂きたいと思います。そして今の時代に即したまたこれからの介護、福祉の働きについてもしっかりと考えながら新しい在り方を共に作り上げ、育て上げていくことが出来たら良いのではないかと思います。キングスガーデンの働きは段々と全国に知られるようになって色んなご相談を頂くんですが、老人ホームを作りたいという相談はないですね。殆どがキングスガーデンを作りたいという表現の相談が多いということは、やはりキングスガーデンの働きが多くの人々に期待されるようになってきている。私達はその期待に応えていかなければならない。けれど現実に新しい施設を建て上げるということは決してやさしいことでは



ありません。今から10年位前までは、多くの人々の必要に応えるということで、行政の方も非常に力を入れまして必要な費用の3分の2は補助金が付いた。今は3分の1も付かなくなっている、という面でも厳しさがあります。その中であって施設を建て上げていくということは大変な困難があると思います。しかしこれから増々必要になってくると思います。

ご存じのとおり日本は非常な勢いで高齢化社会を迎えている。高齢者が非常に増えている。私も立派な後期高齢者ではなく末期高齢者で（笑）80も大分過ぎていますが。戦後ベビーブームの後の団塊の世代の方が定年退職されていらっしゃる。これらを考えるときにこれからこの働きが増々重要になってきていると思います。そういう中であって施設を作ることも大切ですが、そこでどのような介護（ケア）を私達は行うんですか？それが人の問題ですね。職員の皆さん一人一人にかかってきていると思うんですが、よく聞く言葉は、キングスガーデンに入るとどのキングスガーデンでもほかの施設とは違うということを感じるということおっしゃるんですね。雰囲気もあるし職員の皆さんを見て、ここはどこか違うと。それはやはりキリストの心をもって入居者ご利用者にお仕えしていらっしゃる。先ほどの報告を聞きながら、本当にきめ細やかな配慮をしながら理解しながら一人一人の必要に応じて下さっている職員の皆さんの働きの結果でもあると思いますし、これから増々このような福祉の施設・働きというものが重要になってくるのではないだろうかと思います。



また日本は高齢化と同時に核家族化している。つまり昔は3世代が普通でしたけれど今は1世代。しかも年を取ると老夫婦だけという家庭。老夫婦だけならまだいいんですが、一人暮らしの高齢者の方が非常に増えてきている。一日中誰とも話すこともない。そして病気になっても誰も気付いてやれない。どうしたらいいだろうかと途中で孤独な死を遂げていく高齢者が増えている。私達はそういう時代や社会の変化をしっかりと見極めながら、じゃあ私達はどうしたらいいんですか、ということも大きな課題になっているのではないのでしょうか。私達はそういった問題にも視野に入れながらこれからの働きというのを行っていくことが必要だと思います。その為には施設における介護の働きと同時に、在宅と言いますか地域社会における働きというものも非常に大切なものであると思っています。

私もキングスガーデンの働きに関わらせていただきながらいつも3つの聖書の御言葉を思い浮かべているわけですが、第1はマタイ25：40の御言葉ですね。「最も小さい者たちのひとりにしたのはわたしにしたのです」人間的社会的に言えば必要とされないような、取るに足りないと思われるような人に仕えることこそ、主イエス様にお仕えしていくんだということ。逆の言い方をすれば主イエス様にお仕えする心で人生の先輩に仕えていくということを大切にしたいと思います。

第2はゼカリヤ書の言葉ですね「夕暮れ時に光がある」この言葉を考えた時に「黄昏」という言葉が浮かんできたんですね。年を取ると黄昏時になってくる。この黄昏という言葉には何となく寂しさ、不安、希望のなさというのが浮かんできます。今日の多くの人達はまさに黄昏の中に生きていらっしゃるのではないかと。けれども私達クリスチャンまたこのキングスガーデンの働きに関わっていった時に、人々は夕暮れ時になればなるほど光り輝いた時を過ごすことが出来る

ということです。孤独な中不安に怯えながら希望なく生きるのではなくて、本当に神様の前にまた人の愛にふれて生きていこうと、今日1日生きていくぞという気持ちを持ちながら喜びと感謝をもって生きていく。そんなことが出来るような働きをキングスガーデンを通してしていきたいと思いますね。

3番目はイザヤ書の中の言葉ですが「砂漠を主の園のようにする」ですね。日本社会は特に高齢者にとっては砂漠のような社会・時代であると言ってもいいと思いますね。人間的な潤いのないそういう中で高齢者の方々は生きていらっしゃるわけです。また社会がそういう社会になってしまっている。でも私たちは個人だけではなく社会全体が変えられていく働きも必要であると思います。実は私は長い間牧師をしておりましたけれど地域において色んな働きをさせて頂きました。まず最初に行ったものは保護司の仕事ですね。2番目に約30年間民生員の働きをしてまいりました。そうしますと様々な生活上の問題、人間関係、色んな生活の問題に触れてくるわけですね。でその相談を受けるときに私は必ず教会の牧師室に来てもらって教会の中で相談に預かるようにしているわけですね。近くに93歳位の熱烈な天理教の方がいまして、家族がいなくなったので近所の人心配をして、私はすぐ福祉事務所に連絡をしてヘルパーの方を派遣してもらいました。その方はヘルパーが来た時に近所の方に向かって何を言い出したかと言いますと「私はこれからキリストさんにお世話になることになりました」(笑)天理教の方ですよ。近所の方はびっくりしちゃった。福祉事務所から来たヘルパーを教会から来たと思ってる。相談する時はいつも教会に行って相談してたので、てっきりキリストさんのお世話になったんだと思った。近所の人に言うので近所の方はびっくりしちゃって、本当にいい証しを近所の人にしてくれたなと(笑)。地域社会における証しとか働きとかは非常に大切だと思いますね。

もう一つは小学校と中学校のPTAの会長をいたしました。これによって人との色んな触れ合い、子供だけではなく親たちとの触れ合いも持って人間関係を築きました。そういうような働きを通して私たちは地の塩世の光としての働きがある。塩はまず塩であることが大切ですね。塩が塩気を失ったらしおうがない(笑)とイエス様はおっしゃいましたけれどね。また塩が塩だけ固まっていたんでもしおうがないんですね。溶け込んでいなくなっちゃいけない。私たちクリスチャンはクリスチャンであることが大切ながらまた地域社会に溶け込んでいくことが大切だと思いますね。そういう中でこのキングスガーデンという福祉の働きをしながらまさにこれが地域社会に密着した働きだなあ、と同時に家庭とか社会の中で過ごしてらっしゃる方々の為にも私たちは出て行ってお仕えをしていくという働きも増々必要になっていくと思いますね。そういった働きがこれからキングスガーデンにとって大切な働きになってくるのではないかと思います。

そういう中でキングガーデンが全国に広がり、この2日間充実した研修の時を持つことが出来ました。是非これから皆様それぞれの職場にお帰りになったときにこの研修会で学んだことを活



かして、そして一人一人の人生の先輩にお仕えになっていただければいいのではないかと思います。終わりにシェークスピアが言った言葉に「終わり良ければ全て良し」という言葉があります。人生の終わりが本当に光り輝く終わりである、「良かった」と言えるような時を過ごしていただくためにも是非皆様のこれからのお証しを期待しております。